

思考動詞による文末表現の史的研究

渡邊由貴

本論文では、「と思ふ」を中心とした思考動詞による文末表現について、史的観点からその使用状況や機能、位相面や文体面での特徴等を考察し、文末表現「と思ふ」が推量表現に準ずる用法を獲得していく過程や、思考動詞による文末表現がどのような資料や場面で多く用いられてきたか、「と存ず」「とおぼゆ」「と思はれる」「と考へる」等の思考動詞による文末表現が、それぞれ文末表現「と思ふ」とどのような関連性をもちながら用いられてきたか等について明らかにした。

第1章

文末思考動詞の中でも最も多用される「と思ふ」の、中古から近代の文学作品における使用状況を概観した。意志・願望表現をトの内部にとる文末表現「と思ふ」は、中古から存在しており、中世においては、軍記物語を中心に、意志表現をトの内部にとる形式が多くあらわれる点が特徴的であった。推量・疑問表現をトの内部にとる文末表現「と思ふ」は、中古においては推量や疑問の表現を用いた詠嘆的な意味の用例がみられる。中世後期の口語的な資料等で、「うずと思ふ」等の形が出現するようになり、近代になると「だろうと思ふ」等の用例が増加する。判断・叙述表現をトの内部にとる、一種の推量表現として機能する文末表現「と思ふ」は、中古においてはみられない。中世・近世になると少数ながらみられるようになるが、この用法の文末表現「と思ふ」が多くみられるようになるのは近代になってからである。

すなわち、意志・願望表現をトの内部にとる文末表現「と思ふ」が最も古くに発達し、その後、推量・疑問表現や判断・叙述の表現をトの内部にとる「と思ふ」が発達した。文末表現「と思ふ」による推量表現は、近代になりその使用が急増していた。また、文末表現「と思ふ」定着後の近代の資料であっても、文語文には文末表現「と思ふ」による推量表現があらわれにくいことも明らかにした。

第2章

中世における文末表現「と思ふ」「と存ず」について検討した。文末表現「と存ず」は、基本的には話手が聞手より低い立場にある場合に多く用いられ、その際は「候」のような敬語助動詞・補助動詞を伴うことが多い。ただし、話手が聞手と同等以上の立場にある場合や、多数の聞手に向かっての公の場での発言等は、「候」のような敬語表現は必須ではなく、文末表現「と存ず」自体は、公的なあらたまり語としての性格が強い。一方、文末表現「と思ふ」は、使用者が場の上位者であるか、ある程度親密で私的な関係の場合に用いられる表現であった。

この傾向は、特に軍記物語において顕著なものであるが、説話等には文末表現「と存ず」が使用されていない資料もあり、そのような資料においては目上の聞手に対しても文末表現「と思ふ」を使う例がみられた。

また、軍記物語を中心とした中世語資料においては、文末表現「と思ふ」のトの内部の情報は願望・意志に偏っており、主観明示の定型的表現であった。一方、文末表現「と存ず」については同じ資料の中に「意志・願望＋と存ず」「推量・疑問＋と存ず」「判断・叙述＋と存ず」、いずれの用例もみられた。文末表現「と存ず」は文末表現「と思ふ」の謙讓表現であるが、文末表現「と存ず」はトの内部に推量や判断・叙述の表現をとる例も多いことから、その用法が文末表現「と思ふ」より広がった。

第3章

『虎明本狂言集』における「と＋思ふ」「と＋存ず」の形式について検討した。いずれも主として会話文にあらわれる表現であるが、基本的には話手の立場が聞手と同等以下の場合には「と＋存ず」が、話手の立場が聞手と同等以上の場合には「と＋思ふ」が用いられる点で、中世軍記物語における文末表現「と思ふ」「と存ず」と同様であった。また、観客への配慮表現として、名乗りや独白等の場面においても「と＋存ず」が用いられることも多かった。

『虎明本狂言集』において、目上の聞手（観客への配慮含む）に対する発話で「と＋思ふ」が少ないのは、「と＋存ず」という謙讓・丁重の形式が多用されている中で、高い立場の聞手に対し、「と＋思ふ」をあえて選択し、使用することがはばかられるためであると推察される。また、「と＋思ふ」のうち「と＋思ひ候」のように丁寧語化された形式は、女性による名乗りや注釈等、限られた範囲にしかあらわれなかった。ただし、文末形式以外の形であれば、「と＋思ふ」を目上の聞手に対して使用しにくいという制限は弱まっていた。男性話者に比べ女性話者は「と＋思ふ」を使用する傾向もみられた。

なお、軍記物語においては「と＋存じ候」のように、「候」を付した形で目上の聞手への敬意的配慮をあらわすのに対し、『虎明本狂言集』においては目上の聞手に対しても「候」を伴わない「と＋存ず」の形が用いられることが多い等、軍記物語における使用状況とは異なる点もみられた。

第4章

文末表現「と思ふ」と「とおぼゆ」について検討した。中世まで、文末表現「とおぼゆ」は、その内部に外界の事物についての情報をとる形で用いられた一方、文末表現「と思ふ」は主として話者自身の心のあり方の情報をその内部にとる表現として用いられていた。しかし、文末表現「とおぼゆ」は、動詞「おぼえる」が記憶の意味に特化していったことに伴い、衰退傾向をみせる。そして、既に多用されていた文末表現「と思ふ」との対応関係が明確な「と思はる」が、文末表現「とおぼゆ」を引き継

ぐこととなった。

ただし、文末表現「と思はる」は主に文章語で用いられる表現であるため、より口語的な表現において使われやすい文末表現「と思ふ」が、近代以降その内部に外界の事物についての情報を取り、一種の推量表現としての用法にまで拡大するのを妨げなかった。

このように、文末表現「と思ふ」の拡大と文末表現「とおぼゆ」の衰退とは関連性がうかがえ、中世において文末表現「とおぼゆ」という形式が用いられていたこと、推量表現としての性格は持たないものの、文末表現「と思ふ」が表現形式としては多用されていたこと等、二種の思考動詞表現が分担しつつ発達していたことが、近代以降、文末表現「と思ふ」による推量表現が発達する土台となったと考えられる。そして、文末表現「と思ふ」の発達により、「ゆ・らゆ」「れる・られる」等の自発形式を伴わなくとも文末思考動詞が外界の事柄内容を直接受け、推量の意味を表示できるようになり、また、口語的な表現の中でも、文末思考動詞による推量表現が多用されるようになった。

第5章

第1章でみられた、近代において「と思ふ」が口語文に用いられる一方、文語文には用いられにくいという傾向を裏付けるべく、近代論説文を対象に、文末表現「と思ふ」の口語性について検討した。

福沢諭吉・坪内逍遙・森鷗外による論説における文末表現「と思ふ」の使用状況を調査したところ、共通して口語文に出現しやすいことがわかった。同じ人物による著作であっても、また、同時期の著作であっても、口語文には文末表現「と思ふ」が多くみられたのに対し、文語文にはあらわれにくかった。つまり、近代における文末表現「と思ふ」の出現の多寡は、個人の使用語彙や著作の発表年代よりも、口語・文語という文体の差によるものであった。文末表現「と思ふ」をトの内部の情報別にみると、近代文学作品と同様、判断・叙述や推量・疑問の表現をトの内部にとる例が多くなっていた。

文語文においては、文末表現「と思ふ」がほぼ用いられていない一方で、文末表現「と信ず」がいくつかの論説にみられた。このことから、文末思考動詞自体が文語体の文章になじまないというより、文末表現「と思ふ」のもつ、個人的な考えをいわば気軽に表明するという性格のために、文末表現「と思ふ」という表現が硬質な文語文には用いられにくかった可能性がある。

第6章

洋学資料における文末思考動詞について検討した。もっとも英文との結びつきが強い直訳物の日本語において、文末表現「と思ふ」の使用が少なかったこと、もっとも自然の会話に近い表現が用いられていると考えられる会話書において、文末表現「と

思ふ」「と存ず」が多く用いられていたこと、さらに、いずれの資料においても、日本語文における文末思考動詞と英文における“I think”等の思考動詞を用いた表現との結びつきは強いとはいえなかったことから、欧文脈によらず、既に当時、口頭語として「と思ふ」「と存ず」等の文末思考動詞が定着していたとみられる。

このように、推量表現に準ずる文末表現「と思ふ」の定着に関して、洋学資料の影響ははっきりとは認めがたく、文末表現「と思ふ」による推量表現の定着は、欧文脈の影響ではなく、日本語内部の変化がもたらしたものであると考えるのが妥当である。

ただし、文末表現「と考へる」「と想像さる」等は、直訳物の中に比較的多くみられるが、調査の範囲では近世以前の日本語資料にはみられないことから、洋学資料による影響で日本語の中に定着した可能性がある。洋学資料は文末表現「と思ふ」の定着ではなく、「と考へる」「と想像さる」等、文末思考動詞のバリエーションを増やすことに貢献したと考えられる。

第7章

国定国語教科書における「と思ふ」「と存ず」を中心とした文末思考動詞について検討した。文末表現「と思ふ」の用例数が期を経るごとに増える一方、文末表現「と存ず」は、現代に近づくにしたがって、用例数が減っていた。また、文末表現「と存ず」より文末表現「と思ふ」の方が早い巻で提出されることが多く、意志・願望の表現をトの内部にとる文末思考動詞の方が、推量や判断の表現をトの内部にとる文末思考動詞よりも先に提出される傾向がみられた。文体面では、文末表現「と思ふ」「と存ず」とも、手紙文や会話文に多くあらわれた。また、待遇面では、文末表現「と思ふ」は、第三期までは目上の相手に使用されている例がないものの、第四期以降は目上の相手に対しても用いられていた。これは、現代と同様、文末表現「と存ずる」のかわりに「と思います」の形が使われるようになっていった過程を示している可能性がある。

文末表現「と思ふ」の用例が期を経るごとに増え、また、文末表現「と存ず」の主な使用場面であった手紙文においても、次第に「と思ふ」が使われるようになっており、国定国語教科書においても文末表現「と思ふ」が重要な位置を占める表現になっていた。また、二つ以上の期で共通して掲載されている「共通教材」における文末思考動詞と、それに対応する表現を比較することで、文末思考動詞と「べし」「ん(む)」「でせう」等の助動詞との関わりの一端がみられた。

第8章

帝国議会会議録における文末思考動詞の使用状況を検討した。帝国議会会議録には、「と思ふ」「と存ず」「と考へる」を中心に、文末思考動詞が数・バリエーションともに多くみられた。会議では、自らの意見を述べる場面が多く、文末思考動詞があらわれやすいこと、また、同一話者による発言が長くなった際、文末の表現が単調になる

ことを避けるべく様々な文末表現を使用していることから、他の資料と比べて多くのバリエーションがみられるのだと考えられる。また一方で、文末表現「と認む」等、議事進行に関わる表現として、文末思考動詞がある種定型的に用いられているものもあり、この点は会議録に特有の傾向であった。なお、現代の国会会議録にも、「と思う」「と考える」「と認める」等、帝国議会議録で多用されていた文末思考動詞がみられた。

また、「と信ず」「と思はる」「と判断さる」等、トの内部に判断・叙述表現をとり、推量表現的に用いられる文末思考動詞のバリエーションが多く、文末思考動詞による推量表現が多様化し定着していた。近代には文末表現「と思う」の推量表現的な用法が定着したのと同時に、「思考動詞による文末表現」という表現形式自体が定着し、現代に至っている。また、文末思考動詞が語彙的に多様化することで、より細かく思考のニュアンスを伝えられるようになっていた。

第9章

古典語の助動詞の衰退と、文末思考動詞の発達との関連性をみる試みとして、文末思考動詞と助動詞の「べし」との類似点を検討した。

古典語から近代語への流れの中で、助動詞による推量表現はその種類を減らす一方で、助動詞以外の表現で推量をあらわす傾向がみられるのであるが、「と思ふ」を中心とした文末思考動詞も、推量の助動詞の衰退にともない、現代語の助動詞ではあらわしにくい意味を担う形で用いられていることが確認できた。

具体的には、過去の不確かな記憶を述べる場面で使用可能であること、また、自らが思考したことを客観的な事実として叙述するという詞的な性格をもつ形式である点において、文末思考動詞と「べし」と文末思考動詞との間に類似性が認められる。「べし」の持っていた意味範囲のうち、現代語の推量の助動詞「だろう」では担えない上記のような部分を、文末思考動詞が引き継いでいる可能性がある。

このように、推量表現に準ずる文末表現「と思ふ」が固定化して用いられるようになるのは近代であったが、それ以前にも、文末表現「と思ふ」は主として意志・願望表現を内部にとる形で使用されていた。そして、中世においては、「と存ず」や「とおぼゆ」等の文末思考動詞が、待遇面や機能面で「と思ふ」と役割を分担しながら用いられていた。

しかし、近世頃には、文末表現「と思ふ」と機能面での役割を分担していた文末表現「とおぼゆ」が衰退傾向をみせ、その推量表現としての機能の一端を、近代には「と思ふ」が担うようになった。また、待遇面での役割を分担していた文末表現「と存ず」も、近代以降、ごく丁寧な場面にその使用が限られてくるようになるが、その一方で、文末表現「と思ふ」は「と思ひます」の形で目上の相手に用いられることが多くなっていった。加えて、文末表現「と存ず」は、中世からトの内部に推量・疑問や判断・叙述の表現をとる形で用いられており、「と思ふ」より用法が広がったが、文末表現

「と思ふ」が推量表現としての機能を獲得したことも、「と存ず」のかわりに「と思ふ」を使うという流れを後押しした可能性もある。

すなわち、文末表現「と思ふ」の発達の背景として、「と存ず」「とおぼゆ」という文末表現の存在があり、待遇面・機能面での役割を分担しながら用いられていたこれらの表現が衰退するに伴い、「と思ふ」がそれらの表現が担っていた役割を担い、使用範囲を拡大させたのである。

近代には、文末表現「と思ふ」が一種の推量表現として用いられるようになっていくが、早くは口語文で書かれた文学や論説、洋学資料の会話書等、口語性の強い文章においてみられる表現であった。また、洋学資料や国定国語教科書、帝国議会議事録といった近代語の資料には、思考のニュアンスを使い分けるために、「と思ふ」の他、「と思はる」「と考へる」「と信ず」等の、トの内部に判断や叙述の表現をとる様々な形式がみられた。「と存ず」「とおぼゆ」という文末表現が衰退傾向をみせる中でも、近代において思考動詞による文末表現が「と思ふ」に一本化されたわけではなく、思考のニュアンスを異にする多くの種類の文末思考動詞が、一種の推量表現として使われるようになったのである。ここに、文末思考動詞による推量表現の発達をみてよい。

このように、近代における文末表現「と思ふ」の使用範囲の拡大は、思考動詞の体系の中で位置づけることができるが、加えて、古典語の推量の助動詞の衰退も、「と思ふ」が一種の推量表現として用いられるようになったことと関連があると考えられる。一例として、文末思考動詞と「べし」との間に類似性を認めてよいと考えられ、「べし」の持っていた意味範囲のうち、過去の不確かな記憶について述べる場合等、現代語の推量の助動詞「だろう」では担えない部分を、文末思考動詞が引き継いでいる可能性がある。

文末表現「と思ふ」による推量表現の定着は、他の文末思考動詞や推量の助動詞の盛衰という、日本語内部の変化がもたらしたものであると考えるのが妥当である。なお、欧文脈等の外的要因は、文末表現「と思ふ」による推量表現の定着には関連していないが、「と考へる」「と想像さる」のような文末思考動詞のバリエーションをもたらすことに貢献していたと考えられる。